



山村再生担い手づくり事例集

その後いかがお過ごしですか？
プロジェクト

矢作川流域圏懇談会
2017年3月

矢作川流域圏懇談会 とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

山村再生担い手づくり事例集

「その後いかがお過ごしですか？」プロジェクト とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」Ⅰ～Ⅲを、2013(平成25)～2015(平成27)年度にかけて作成しました。

3冊の「山村再生担い手づくり事例集」取材対象となった64団体は、取材後もさまざまな形で進化しています。そこで各団体に再取材を行い、その記録を共有する「山村再生担い手づくり事例集その後いかがお過ごしですか？プロジェクト」を実施し、取材者・取材先・流域圏懇談会・読者のネットワークの拡大と深化を図ることにしました。今年度は最初の取材から3年たった「山村再生担い手づくり事例集」Ⅰの取材対象団体への再取材を行い、その記録をまとめました。



目 次

長野県

根羽村

1 根羽村森林組合	1
2 農事組合法人 杉っ子	5
3 根羽村猟友会	7

岐阜県

恵那市

4 NPO法人 奥矢作森林塾	9
5 NPO法人 福寿の里自然倶楽部	12

愛知県

豊田市

6 矢作川水系森林ボランティア協議会	15
7 とよた森林学校	17
8 とよた森林学校OB会	20
9 とよた都市農山村交流ネットワーク	22
10 豊森なりわい塾	24
11 株式会社 M-easy	26
12 旭木の駅プロジェクト	29
13 green maman	32
14 農業生産法人 みどりの里	34

岡崎市

15 NPO法人 中部猟踊会・三州マタギ屋	36
16 岡崎森林組合	38
17 おおだの森保護事業者会	40

その後いにかお過ごしますか？プロジェクト



根羽村森林組合



対応してくれた人の名前：今村 豊
 調査員：浅田益章、洲崎燈子
 レポート作成者：洲崎燈子
 取材日：2016年10月20日
 取材場所：根羽村森林組合



試作品の組み立て式ベッドに横たわる今村さん

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

従業員は43名。組合員の森林整備と生産木材の加工で年間総売上は4億円弱。年間200haの間伐を行っているが、材の搬出は52～60ha程度で材積5,000～6,000m³である。製材加工売上は2億2千万円程度であり、在庫の材や根羽村以外からの材を含め年間約2,500m³を加工して工務店に直送している。住宅1棟あたりおよそ20m³なので、年間およそ130棟分にあたる木材製品を出荷している。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

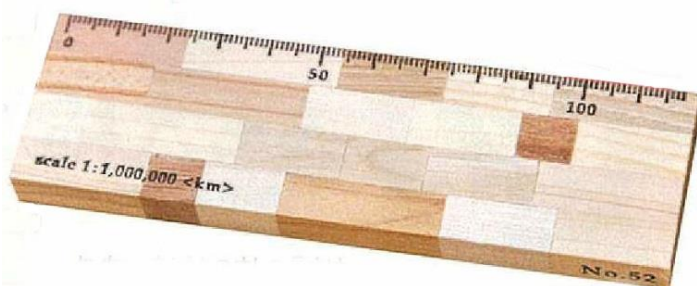
・一般市民が使うことのできる木材加工品は増えたが、個人住宅の着工数は減っている。どうするか、建築材以外にどんな木材の利用法があるかと考え、この3年間でさまざまな製品を作ってきた。



簡易セルフビルドハウス「3坪の家」



中房温泉の家族風呂「根羽の湯」(長野県安曇野市)



* 流域ものさし。矢作川の長さ、118kmにちなんだ11.8cm。
 流域を学ぶワークショップで参加者が、矢作川流域のさまざまな木をモザイク状に並べ手作りする



* 癒やし系の「木っころ」。フリーマガジン「耕Life」とのコラボ製品

どこでもシリーズ



動く木のおもちゃ、スパイラルタワー。軽やかな音を立てながら落ちてくる木の球に、子どもたちは釘付け

(* がついている製品の写真は
耕Lifeより転載)



どこでもブランコ



どこでもオセロ、どこでもウッドデッキ

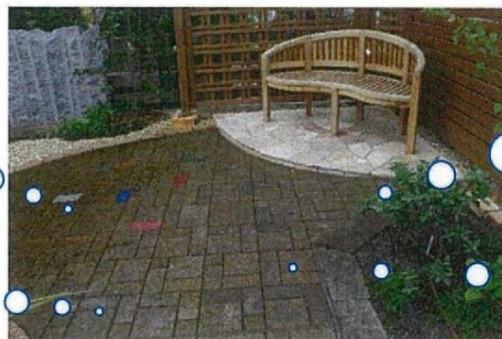


* どこでももちつき機

- ◆安全・安心の木質100%の製品
- ◆地産地消

カラー
48色あり

LED球の
埋め込みもOK

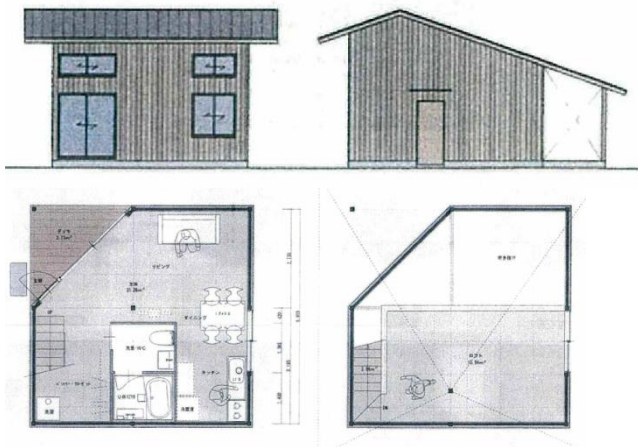


二酸化炭素の固定量

樹のれんが(1,000㎡当たり) 36.7t-CO₂
森のれんが(1,000㎡当たり) 45.8t-CO₂
木煉 (1,000㎡当たり) 55t-CO₂

ブロックのサイズ
3種類あり

環境性能重視型木質舗装材ブロック Weed Lock(ウィードロック) – 材料供給を検討中



9坪スマートエコハウス(ゼロエネルギーハウス)

2011年の震災後、仮設住宅の問題(傷み、利用期限、費用面の保証等)を見て、名古屋の(一社)アースパートナー協議会と開発した。上から見て正方形の一つの角を切ったスタイルで、配置によってさまざまなコミュニティとしての機能を果たせるのがポイント。上物だけで500万円以下に抑えることをめざしている。女川町に30棟建てたいと打診している。

木材の質には最も上等な上小節、2番目の特一、3番目の一等があるが、一等の材でも使えるようにしたい。

・3大学との連携による魅力的な根羽村づくり

信州大学<農林分野での連携、山地酪農の導入>

里山の牛が一生を全うできるようにする。遊休農地を活用し、周囲の森を強間伐して森林空間を作り、放牧林にする。誰でも作れる簡易牧柵キットを開発し、簡易セルフビルドハウスを牛舎にする。根羽村プレイスメイキング(居心地のいい木の空間作り)事業の一環で、農林一体の取組。森林組合員がみんな特伐(特殊伐採)をできるようにして、広葉樹も活用できるようにしていきたい。

岐阜女子大学<森林体験、住居、環境分野での連携>

水源歩道の設置をめざす。最初の一滴を探す道。山里暮らしの指南をする「田舎の先生」制度を創設し、都市部の人々が農家民泊をしに来た時に農林漁業体験や文化、歴史などをいろいろ教えられるようにする。建物景観のデザインとしては、個人向けのタイニーハウス(6畳程度の小屋)を計画している。地主が「田舎の親戚制度」を結んだ方に貸し、田舎の生活とさまざまな智恵や技能を教える。

愛知教育大学<木育分野での連携>

幼児～大人の木育構想に沿った、動く木のおもちゃの製品開発を継続して行う。タイニーハウスの横にトリトン(DIYの総合ツール)と作業小屋を置き、「田舎で真剣に物づくりをして」とアピールする。インスタレーション(空間全体を使ったアート作品)として山の上から沢まで木の球を転がす道等を作る。その他、子どもたちが遊びながら自然の中で原体験を得られるような場所をつくっていく。

・日本全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部の設立

2014年に日本全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部を立ち上げ、木づかいのPR活動「木づかいライブスギダラケキャラバン」を年間30回程度開催するようになって、イベントの実施や木のアイテム製作等いろいろなことを依頼されるようになった。特に豊田のまちづくりに関わる若い人たちとのつながりができたのはよかった。豊田のまちなかのイベントに出展したら、木製品のおかげで人が集まり、楽しみや感動が生まれた。豊田の森林組合さんとも木づかいの連携を図りたい。

木育をやっていると根羽村森林組合の名前が浸透する。「また来てね」と言ってもらえる。この矢作川流域を素晴らしい場所であると感じてもらいたい。発信しているとオファーが来る。人を巻き込むことが大事。イベントを自前でやっているとだんだん出先がお金を出してくれるようになり、資金に余裕が出てくる。日当を出せるようになったので、スタッフに余裕を持てるようになった。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

Iターン職員の定着率向上は引き続き課題となっている。Iターンで森林組合に来ている人たちは、林業をやりに来ていて、村の暮らしを一番とはしていない。一般的な田舎の傾向として、縦の人間関係が強く、林業を志すような自由人には馴染みにくい。村を離れてしまうこともある。ここに来て住むようになった人たちには農地や森を与え、そこで新たなライフスタイルの確立にチャレンジしてほしい。行政が半額位助成してあげて、家を建てられるといいと思う。「根羽村っていいな」と思ってほしい。地域に愛着を持って技を磨き、チェーンソーをサラシに巻けるような人、特伐ができて、花桃が咲き乱れる桃源郷を作れるような人になってほしい。根羽村を、都会から来た人が魅力に感じる、本当の労働を提供できる場にしたい。そのことがIターン職員の定着につながる。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

木や森に関わる団体を集めて横のつながりを作りたい。森や山の感謝祭を海の関係者との協働で、山でも海でも開催したい。また、「田舎の親戚制度」を地域に定着させ、子どもたちに田舎や第一次産業の原体験をさせられる場面を増やしたい。

「気持ちいい～」
どこでも足湯



その後いかに経過していますか？プロジェクト



農事組合法人 杉っ子



対応してくれた人の名前：石原みちゑ 原 小夜子

調査員：洲崎燈子 浅田益章

レポート作成者：浅田益章

取材日：2016年10月20日

取材場所：長野県下伊那郡根羽村1855（農産加工施設、旧根羽村保育所）

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

根羽村の40～70代の主婦15人ほどの団体で、原木椎茸を使ったきのこおこわ、よもぎの草大福、米粉を練ったからすみ、ねぎ味噌たれの五平餅など、地元の素材を活かした手作りの農産加工品を生産し、自家製の野菜とともに村内外のイベントで販売している（主に週末）。岐阜女子大学の学生との共同で、森林組合が根羽杉で作った弁当箱に根羽の山の幸いっぱいのお弁当を入れた「根羽のはこいり娘」も開発した。村内のイベントや仏教行事での食事の提供も行っており、250人分の食事を作ることもある。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

（1）「ねば杉っ子餅」から「農事組合法人 杉っ子」に店舗名変更した。

変更理由：

①食品衛生責任者設置による食品衛生法許可の店に
（菓子製造業営業）

食品衛生責任者：稲垣悦子

②餅以外の商品メニュー充実

- ・根羽村産椎茸を使ったきのこおこわ、
- ・地元産よもぎの草大福、
- ・米粉を練ったからすみ、
- ・ねぎ味噌たれの五平餅など

③売り上げ増加による税金対策。

（2）売り上げ増加。順調でやる気満々、楽しくみんなでやっている。

①根羽村の外からの引き合いが増えた。

②地元の食材にこだわり地産地消のお菓子を手作りで提供

③村内の主婦が末永く安心して働ける職場として仕事場や
各家庭の理解と支援をうけている。

④リーダー役である石原さん（理事長）、原さん（理事）が明るく楽しく引っ張っている。

⑤女性のチームパワーが発揮されてポジティブな活動となっている。

（3）持続可能なビジネスプランができている

高齢化が進み、後継者が不足する中でみんなが頑張れる仕組みとしている。

①「地産地消で生涯現役」のキャッチフレーズを心がけている。ゆるぎない。

②顔の見える隣近所の村民の働く場としてミライへのビジョンもしっかりとしている。

良い食品を作るうえでお客様の声をすぐに生かせるので小量生産の良さが生かされている。

③根羽村で昔ながら使っていた石臼や木型、木箱などを利用している。

村の伝統食品として付加価値を高めることができる。

④販売している食品は生ものが多いので難しいが、その条件をクリアする工夫や知恵をみんなで考えている。



取材風景

地域の変化

根羽村の食材を使った地産地消の食品の人気が出ている。高齢化が進む中で後継者の確保は難しいが、高齢者にもできるような体制を作ることを進めている。元気なうちは働きたいというお年寄りも増えている。また、生もののお菓子が主体であるが根羽村外からの注文も増えている。食品安全に留意して注文にこたえるようにしなければならない。注文があることはよいことである。

これからやろうとしていること

根羽村の村民が末永く、やりがいと楽しみをもって働ける場、環境、支援体制を村ぐるみで理解し応援してもらえるように心がけている。今のままだを地道にやれば期待に応えられる。そう感じます。

食を通じて、村民のふれあいの場を提供してゆきたい。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

地産地消の食事、お菓子作りの場づくり事例は高齢化時代における食・農・健康という大事な目的に合致する良い事例である。どこの地域でも同様なことができると思う。実際それぞれのやり方でやっているので交流するのもいい。

写真



① 農産加工施設所(根羽村)



② 注文数記載のカレンダー



③ 食品営業許可の店



④ 食の祭典イベント出店ちらし



⑤ 地元産よもぎの草大福



⑥ 地元の素材を生かした手作りの農産加工品を仲良く。

その後いかにお過ごしですか？ プロジェクト



根羽村猟友会



対応してくれた人の名前：西尾竹司
 調査員：高橋伸夫、洲崎燈子、竹尾博史、江口佳志
 レポート作成者：江口佳志
 取材日：2016年10月26日
 取材場所：西尾氏事務所

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

昔は各家の玄関に火縄銃が掛けてあり、昭和初期くらいから各部落ごとに猟をしていた。根羽猟友会として一つになったのは50年ほど前。

現在猟友会は総員20名。猟銃所持者は全部で13名、内、空気銃1名でほとんどは罠と銃を両方とっている。その他は罠猟免許のみ。

猟期（銃）は11月15日～2月15日（罠は11月15日～3月15日）、その他期間は駆除期間として罠猟のみをしている。有害鳥獣駆除隊を昨年7月から新たに結成。特にシカとサルの食害がひどく、住民が困っている。サル、シカ、イノシシ、カワウ、アオサギは一年中、申請して報告があったらすぐに飛んでいけるように対応している。

シカは昨年度は244頭捕獲、4月から11月に260頭捕獲した。ほとんど「くくり罠」で捕獲している。長野県では猟期は12cm、それ以外の駆除期間は20cmの罠を使用している。「箱罠」はほとんど入らない。厳冬期はほとんど「巻狩り」で捕獲する。厳冬期のくくり罠は凍り付いてしまい、正常に作動しないことが多いのであまり使い物にならない。根羽村では2007（平成19）年8月に、村が獣肉処理施設をネバーランド内につくってくれた。以前は野原で解体をしていたが、暗くなると車のライトで照らすも自分の陰で見えなくなったり、風があれば木の葉等がかかり衛生面でもよくなかった。今では食肉として売れるようになった。シカがメイン。獣肉は半分はネバーランドに卸して、半分くらいを仲間ですばいっている。イノシシも真空パックして、ラベルを作って売っている。シカは全てネバーランドに卸し、ネバーランドが商品化している。愛知県へも、名古屋市内のホテルに毎年クリスマスには20kgから30kgのシカのロースを納めている。収益はそれほどない。肉自体が高ければ料理も高くなってしまう。だから、損得勘定を別にして、根羽村のネバーランドが捕れた肉を活かして商売してくれればそれでいい。1頭捕っても何千円くらい。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

- ①ニホンジカが毎年増えていっている。
⇒有害駆除数 前回取材時 250頭（H24年）現在377頭（H27） 150%増
- ②長野県 元気づくり支援金申請し、真空パック機械の導入費の一部支援を受けた。
⇒解体獣肉加工後のパック詰めを真空パックにて新技術の導入を行った。
- ③獣肉出荷量増
⇒ ②の支援に基づきさらなる処理出荷量増を目指している。
- ④根羽村猟友会 会員数増
⇒ 2名増の合計22名体制
- ⑤近隣村間の駆除要請を受け活動した
⇒ 売木村に出張駆除。売木村駆除活動できる鉄砲所有者実質3名
- ⑥獣肉の需要は増えている。ネバーランドレストラン、販売所、名古屋のレストランとの取引量増。
⇒ 鹿肉は間に合っていないくらい

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？ 現在の課題は何ですか？

- ①猟友会員数が少ない、後継者不足。
⇒3年前に比べ会員数は2名増。後継者の対策はいまだめどつかず。
- ②【県境問題】 茶臼山 愛知県側からのニホンジカが長野県に入ってきている。茶臼山でかなりの数が増えている印象。問題は、長野県側で必死に駆除しても愛知県側から入ってきては数が減らない。さらに長野県側から県境を越境して愛知県側の駆除はできない。
⇒愛知県、長野県両県が問題、情報を共有して連携体制で駆除にあたる必要がある。
- ③獣肉需要が上り調子だが
⇒実質鹿肉は在庫不足とのこと。駆除頭数は増えているのに間に合わないのは、駆除方法にも問題ある。食肉加工に回ってきているのは駆除数の約半数とのこと。実質人手不足で処理施設まで持ってこれないため。(山からおろしてこれないので埋設)駆除数は増えるが食肉になる量は人手が増えないと変わらない。さらに、食肉に適さなくなったもの(罠にかかったまま死亡、銃弾が腹に入った状態)は埋設処分している。無駄になるものを減らすべく、今後はその活用方法を模索していく。

写真



根羽村【ねばーらんど】 猟師飯メニュー
長野県魅力発信ブログより転載

有害駆除捕獲実績

鳥獣名	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
ニホンザル	6 頭	27 頭	4 頭	8 頭	11 頭	7 頭	1 頭
ウサギ	6 羽	2 羽	3 羽	13 羽	22 羽	12 羽	28 羽
キジバト	19 羽	39 羽	50 羽	33 羽	32 羽	59 羽	20 羽
カラス	6 羽	11 羽	5 羽	11 羽	10 羽	17 羽	19 羽
イノシシ(猟期外)	34 頭	145 頭	61 頭	48 頭	66 頭	72 頭	58 頭
イノシシ(猟期内)	20 頭	68 頭	14 頭	18 頭	14 頭	18 頭	17 頭
イノシシ(合計)	54 頭	213 頭	75 頭	66 頭	80 頭	90 頭	75 頭
ニホンジカ	148 頭	107 頭	138 頭	250 頭	310 頭	334 頭	377 頭
ツキノワグマ	1 頭	1 頭	1 頭	2 頭	3 頭	2 頭	3 頭
カモシカ	15 頭	15 頭	15 頭	15 頭	15 頭	15 頭	4 頭
カワウ			1 羽	8 羽	11 羽	2 羽	5 羽
アオサギ			1 羽	4 羽	3 羽	3 羽	3 羽
アライグマ			1 頭	3 頭	10 頭	7 頭	5 頭

根羽村猟友会有害駆除実績

その後いにかお過ごしていますか？プロジェクト



NPO法人 奥矢作森林塾



対応してくれた人の名前：大島光利(旧理事長)、小林太郎(新理事長)
 調査員：近藤 朗、清水雅子、浜口美穂
 レポート作成者：浜口美穂
 取材日：2016年10月15日
 取材場所：奥矢作レクリエーションセンター(奥矢作森林塾事務局)

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

2000年の恵南豪雨により、一夜にして3万7千m³もの流木が矢作ダムに流れ込んだ。この災害の時、消防長だった大島さんは、山林が荒れていることを身をもって実感し、同志に呼びかけて定年退職後の2006年、同会を立ち上げて山林(里山)再生、水質保全、森林環境教育に取り組み始めた。

そのうちに空き家が増え始め、活用を考える中で、2008年に空き家調査・意向調査・データ分析を行い、2009年には、移住希望者や都市の人も巻き込みながら「古民家リフォーム塾」も始めた。

同団体のスタッフは5人だが、地元住民、移住者などに手伝ってもらいながら事業を進めている。

<里山再生>

●炭焼き…ダムに流れ込む流木を一度に大量に炭化する大型窯、伝統的な黒炭窯、ドラム缶を利用した研修窯3基があり、研修窯は地元小中学生の森林環境教育に使用。流木炭は、リフォームした家の床下調湿、土壌改良、水質改良に活用。木酢液からディーゼル燃料を抽出するほか、稲のイモチ病を抑える実験をしている。

●河川環境整備…河川に流木炭を入れて水質保全。地元住民・小中学生と、養殖したカワニナとホタルの幼虫を放流し、ホタルの里づくりを行う。河川の草刈りの応援、生きもの調査などによる環境教育も。

●「里山ぼらんていあ」…毎月第2日曜日に実施。古民家の手入れ、田んぼや畑仕事、山仕事など。

●公園環境整備…草刈り、剪定、間伐材でベンチづくりなど。

<田舎と交流、移住につなげる取り組み>

●古民家リフォーム塾…毎年、1泊2日で10回講座を実施。地元の大工さんが指導。現在は、移住者待機住宅として利用予定の旧串原駐在所をリフォーム中。

●里山体験イベント…どんど焼き、つるかご編み、ヘボをぼう、中山太鼓体験、縁会(独身男女ふれあい交流)、等々。

●田舎暮らし体験館「結の炭家(すみか)」…リフォーム塾で一番初めに再生した築130年の古民家。宿泊し、田舎暮らしの体験ができる場、地元の人と交流できる場にしている。

<指定管理者として運営>

●奥矢作レクリエーションセンター ●串原体験道場「創手味亭(つくってみてい)」 ●串原郷土館

<情報発信>

●広報誌「山結人(やまゆいびと)」を発行…新聞折り込みや、串原地域では市の広報紙と一緒に全戸配布し、地域に会の活動を発信している。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

●予定通り！ 代表が交代

2015年9月1日に大島さんから小林さんに代表を交代した。前回調査(2013年)の時に伺った課題が「NPOの後継者づくり」だったので、その課題が解決されたことになる。2006年に団体を設立してから今年で10年。大島さんは当初から「10年のうちに代表を交代しないと森林塾はつぶれる」と思って後継者づくりを意識していたという。

小林さんは、20年前に山仕事がやりたいと埼玉県から串原村森林組合に就職。その後、合併により恵南森林組合で16年間、森林管理業務に従事。2014年に大島さんから「もっと地域に密着して楽しくやってみないか」とスカウトされた。

●スタッフの若返り

スタッフは、前回調査時より1人増えて6人になり、代表だけでなくスタッフも若返った。組織は「地域振興部門」「森林管理部門」「施設管理部門」に大きく分かれるが、全体像だけ全員で決めて、あとは各部門のトップに任せる方針で運営している。

●「地域の課題解決」の役割が増大

市の指定管理、管理委託の事業が年々増えている（森林問題、交通問題など）。串原村の時は職員が30～40人いたが、合併後の串原振興事務所には職員が4人だけ。金もない。行政が本来の行政の役割を果たせないため、「我々がやらないと地域が守れない」「年寄りから子どもまで生き生き暮らせる地域づくりを」という意識でやっている。森林塾が地域の課題を調べ、計画を立て、実行する。それを行政がバックアップする体制で串原の事業が進められている。全ての事業を「移住・雇用」に絡めている。

●山で飯を食おう！

三宅林業、串原農林、恵南森林組合などと連携しながら、森林の整備を進めている。また、「串原・里山づくりの会」をつくり、林野庁の事業を活用して毎週1回作業を行っている。9割以上が移住者で、チェーンソー講習から始めた。1000円の時給を払っている。移住者が「山で飯が食えるよう」に、力を入れている事業の一つ。

また、鳥獣害対策と移住者の仕事づくりも絡めている。移住者には狩猟免許を取るよう勧め、今年は10人が講習会に参加し、9名が免許（わな）を取得した。肉を流通させるため、食肉加工の中間処理施設の誘致を図っている。

●移住者も「みんなでやろまいか！」

移住者は増え続け、現在7家族が空き家待ち状態。10年間で66人が移住した。恵那市の中で串原小学校・中学校だけが子どもの数が増えている。串原こども園も3～4人だけだったのが今や20人と大幅増。

古民家リフォーム塾1期生3人がリーダーとなり移住者の会をつくって、年一回、結の炭家（ゆいのすみか）で交流会をしている。女性たちは、大島さんの奥さんがリーダーとなることがあるごとに集まり、朴葉寿司、野草の天ぷら、草餅などを作る会を実施している。移住者の悩み事はこれまでなら大島さんに集中していたが、今は移住者の会のリーダーが解決することも多くなった。森林塾のキャッチフレーズ「みんなでやろまいか！」に近づいてきている。

●串原郷土館（郷之驛）の復活とサトノエキカフェ

2011年に設立された奥矢作移住定住促進協議会（奥矢作森林塾が事務局）では、2013・2014年度に農水省の交付金事業を活用して、市所有の“開かず”の串原郷土館を1年半かけてリフォーム。眠っていた多くの民具はデータ化した。今年から移住者が館内でサトノエキカフェを営業している。移住者が生計を立てる場所の一つとなるよう、徐々に郷土館の機能も復活させていく予定。

●奥矢作湖をカヌーのオリンピック公式練習場に

恵那市カヌー協会とタイアップして、2020年の東京オリンピックを目指し、奥矢作湖を公式練習場として認めてもらうよう国交省と協議中。一般の行楽客にもカヌー体験をしてもらえるよう様々なコースを考えている。

●地域間の横のつながり「恵那市NPO連絡協議会」が始動

NPOの会計・マイナンバー問題などの研修会、交流会などを行っている。

現在の課題は何ですか？（小林さんへの質問）

スタッフが30代、40代の現役なので、みんなの生計を立てることがまず根本としてある。その上で地域の課題に取り組まなくてはならない。仕事がどんどん増えていて大変だが、やりがいはある。

また、スタッフは移住者ばかり。地域住民からの期待を込めたプレッシャーもあるが、地元の名士である大島さんがやってきた10年間で得た信頼がバックにあるから安心して取り組める。

今の仕事の魅力は？（小林さんへの質問）

ずっと森林組合で一人当たりの生産性を上げることだけを考えてやってきた。今は、地域課題としての荒廃森林を再生させるんだという思いで、ただ汗をかくだけで幸せを感じるセミプロたちとも一緒にやっている。精神的にも、補助・助成金を活用する意識も変わった。今は、やっている人が幸せにならないとダメだと思っている。

流域全体で移住者が増えていくよう、繋がるためのツールになればいい。

下流の子どもたちをいかにして上流部に呼ぶかということで、10年前から毎年7月第3土曜日に「奥矢作森林フェスティバル」(主催:矢作水源フォレストランド協議会、共催:奥矢作森林塾・矢作ダム管理所)を開催している。今年は1300人の参加があった。下流の人たちに上流の状況を見てもらいたい、ダムの役割も知ってもらいたいと思っている。

10月第3日曜日の中山神社のお祭り「中山太鼓」にも外部の人たちに参加してもらおうと、森林塾が交流事業として企画。中山太鼓保存会の協力で叩き方の指導も行っている。前日から奥矢作レクリエーションセンターに泊まって稽古をする。現在、中山太鼓参加者の約6割が外部の人。

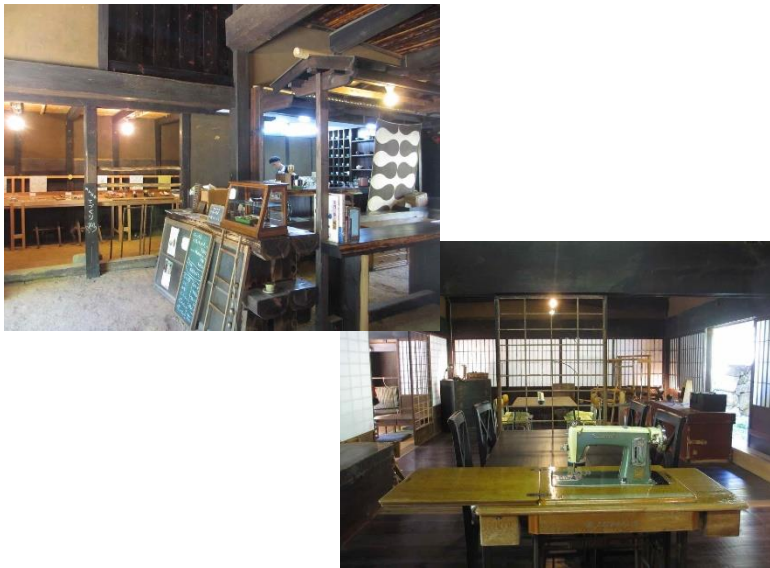
写真



小林さんと大島さん



サトノエキカフェを運営する藤本さんと息子のあおくん。京都から移住してきたばかりの時は人見知りしていたというあおくんは、今は信じられないくらい人懐っこく、のびのびと遊んでいる



まったりと落ち着くサトノエキ内部



縁側でまったり。心地よい時間が流れている

その後いかにお過ごしですか？ プロジェクト



NPO法人 福寿の里自然倶楽部



対応してくれた人の名前：横光八洲男 事務局長
 調査員：近藤 朗、清水 雅子、浜口 美穂
 レポート作成者：近藤 朗
 取材日：2016年10月15日（前回取材日 2013年11月8日）
 取材場所：福寿の里事務所（岐阜県恵那市上矢作町）

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

- ・過疎化と高齢化が進む上矢作町に少しでも活気を取り戻したいということで、NPO法人 福寿の里自然倶楽部を立ち上げた。信号もコンビニもない町だが、約10haの「アライダシ原生林」（正式名称：アライダシ自然観察教育林）をはじめ手付かずの自然だけはどこにも負けない。北の南限と南の北限の自然が融合した地域にあるアライダシ原生林は、他に類を見ない珍しい植生が見られる。霊峰大船山、その山腹にある大船神社はかつて信仰の山として村人の永遠の心のふるさとである。境内には樹齢2,500年とも言われる巨樹の弁慶杉があり、また近隣の標高1,000mある大船牧場では360度のパノラマが楽しめ、これらを巡るエコツアーを実施している。
- ・12月には間伐体験（人工林：ヒノキ・スギ）も行っている。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

●指定管理者として地域の担い手になる

福寿の里自然倶楽部（2011年4月設立）は、2014年4月より、上矢作町にある3つの宿泊施設「福寿の里モンゴル村」、「越沢コテージ」、「コテージかわせみ」の指定管理者として運営を任されることとなった。宿泊者にアンケートを実施したり、手紙を郵送するなどきめ細やかな配慮を行っており、これらを通じてアライダシ原生林を始めとする矢作川上流域の自然を伝えたいと願っている。リピーターも多いという。指定管理者制度とはいえ、都会のように他に競合相手がいるわけではなく、負担も大きい、恵那市（上矢作振興事務所）からは頼りにされている存在である。（取材者は、なくてはならない存在であると感じた。）

●アライダシ原生林ツアーの継続実施と定着

福寿の里創設時（2011年）より実施してきたアライダシ原生林エコツアーも6年目を迎え、参加者も安定、定着してきた。「手つかずの自然を伝えたい！」思いは今も変わらず、会の横光哲理事（横光八洲男事務局長の次男）はツアー担当をしている。また福寿の里の講師に名を連ねている赤尾友和さんは、根の上高原でインタープリターをされている方（自然体験工房NENO代表）で、主にガイド養成を担ってもらっており、御子息含め若いメンバーとの連携や役割分担が構築されてきている。

●恵那市合併（2004年）後の新しい連携

福寿の里が原生林ツアーを実施している事、また宿泊施設の運営を担っている関係で、今まで関わりの深かった奥矢作森林塾の他に、恵那市他地域のNPO、例えば「心の合併」プロジェクトを進める「えなここ（2010年設立 恵那市全域）」や、「城下町ホッといわむら（2009年設立 旧岩村地区）」などとも新たにやりとり（宿泊、ツアー受入）をするようになり、繋がりが広がった。

●矢作川下流域の人たちにもっともっと来てほしい！

上矢作は矢作川の源流であり、是非とも愛知県の下流の人たちに来て、アライダシ原生林などを見てほしいというのが、前回取材での希望だった。その取材直前の2013年10月2日に、矢水協を含めた矢作川環境技術研究会（22名）が福寿の里、アライダシ原生林を訪れていたが、当矢作川流域圏懇談会山部会も2014年5月16日から17日にかけて福寿の里でのワーキングを行い、研修等での会議、モンゴル村での地域交流会、宿泊、そしてアライダシ原生林でのツアーも実施した。横光さんはもっともっと来てほしいと願っている。

現在の課題について

2004年の合併で行政機能は恵那市役所に集約され、旧役場にあたる振興事務所の人員等規模が縮小されている。その中で恵那市各地では自立したNPOがそれぞれの地域で独自性を活かした活動を行い、役所機能を補完するという新しい恵那モデルを構築しているように見える。地域の方々が誇りを持って地元を担うという点で素晴らしいと感じる一方で、横光さんが「負担が大きくなっている」と言われたように、行政側も今のうちに、さらに彼らを支えるための継続性を持った新たなシステム(行政とNPOの相互連携)を再構築するべきかなと感じた。これもニュー恵那モデルで。

福寿の里と同日取材した奥矢作森林塾(旧串原村)においても同様な課題が見える。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

「原生林にあまり多くの人たちに来てもらいたくないと思う反面、下流域の人たちには是非源流を見てもらいたいと思う。」とのこと。矢作川下流域にはその水を利用している企業も数多くあり、彼等への広報ツールとして活用しても良い。福寿の里には研修施設もあるため、研修(CSR等)、エクスカージョン利用が期待できる。そのための流域マップ作製やツアーコース設定があると良いかもしれない。

矢作川流域圏懇談会山部会でのアライダシ原生林訪問と福寿の里交流会(2014年5月16日～17日)

是非来てくださいとおの声に応え、素敵な時間を過ごさせていただきました。

山部会(恵那)WGを始めてモンゴル村で開催した後、福寿の里自然倶楽部の方々などとの交流会を同場所で行いました。福寿の里からは、度会三治理事長、横光八洲男事務局長を始め横光哲理事まで多くの方々に参加いただき、串原林業の三宅大輔さん、恵南森林組合の大島徳雄理事、奥矢作森林塾の大島光利さん、小林太郎さん、根羽村森林組合の今村さん、南木さんなど「山村再生担い手育成事例集」の登場人物が顔を揃えるというにぎやかなものとなりました。翌日も横光さんなどのお骨折りによりアライダシ原生林へのガイドツアーを体験したものです。

写真



今回、横光八洲男さんへの取材、3年前(2013年11月)と変わらない風景



2016年10月 横光さんを囲み福寿の里事務所前にて



アライダシ原生林を訪れた私たち 2014年5月



モンゴル村にて矢作川流域圏懇談会を開催
右端が串原農林の三宅さん 2014年5月



その後、いかにお過ごしですか？ プロジェクト



矢作川水系森林ボランティア協議会



対応してくれた人の名前：西川早人共同代表、丹羽健司前代表
調査員：齋藤大祐、蜂須賀功
レポート作成者：齋藤大祐
取材日：2016年11月16日
取材場所：豊田市職員会館

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

矢作川水系森林ボランティア協議会（以下、「矢森協」という）は、現在14の森林ボランティアグループから構成されており、約250人が所属している。主に、森の健康診断と協働間伐モデル林事業の2つの事業を行っている。

○森の健康診断

2005年から毎年6月第1土曜日に開催している。流域の人工林の現状を市民の五感と科学で明らかにしようと、これまで豊田市、根羽村、恵那市、平谷村、設楽町、岡崎市などで9回行われ、延べ約2,000名の参加者があり、調査も2巡目に入っている。森林ボランティアをリーダーに地元サポーター、自然観察サポーター、一般参加者を合わせて1班8人程度で編成し、植生調査と混み具合調査を合わせて50数項目の調査をマニュアルに従って調査する。現地では、調査後、林分の診断と処方全員で討議し、全体では秋に報告会を開催し、研究者によって集計分析された結果を参加者で共有している。2014年度で10回目を迎え、森の健康診断は終了する。

○協働間伐モデル林事業

豊田市山間部の幹線道路沿いの森林をモデルとして、山主と矢森協で林分調査を行い、森林インストラクターによる講習の後、山主と一緒に間伐を行う事業。年間8ha行っている。山主たちは、森林ボランティア（矢森協）から楽しさを、森林インストラクターから確かな技術を学び、山主たちの山仕事に対する意識が変わりつつある。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

○協議会の状況

- ・2015年3月に体制が変わった。現在は4名の共同代表で協議会を運営している。（西川氏はその一人。）
- ・協議会は15ある森林ボランティアグループのレベルアップや親睦を深めるいわゆる「協議会」の機能をそのまま引き継いだ。
- ・一方、森の健康診断を全国に向けて発信して普及する機能は、「森の健康診断出前隊」を創設し別組織として立ち上がった。
- ・協議会のメンバーは、微増している。年齢層的にはいわゆるリタイア組が多くなっている。協議会では、同じ時期に体験をしたメンバーでグループを作るようになっており、そういったグループも増えてきている。
- ・「山の人のつながり」が広がってきたのはとても嬉しく思っている。最近はトヨタ自動車関連の人も興味を持つようになってきた。

○森の健康診断

- ・「矢作川森の健康診断」は、矢作川森の健康診断実行委員会の一員として参画し当初の計画通り、10回で終了した。
- ・成果としては、矢作川流域の森林の健康状態がどのようなものか分かり、そして多くの方々と交流することもできた。
- ・森の健康診断事業は「森の健康診断出前隊」が展開し、それと協働している。最近は小学校向けのプロジェクトに注力し急速に広がっているようだ。
- ・豊田市域では地元主催の「旭森の健康診断」が始まり、協議会としても応援している。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

○組織の運営と肥大化

- ・協議会のメンバーも増えてきたことにより、組織の運営及び維持管理が年々難しくなっている。
- ・またメンバーの世代交代の時期になっている。自分は最初からいるいわゆる「第一世代」であるが、メンバーの増加により「第二世代」の人も増えてきた。大切なことをいかに伝えていくか、考えている。

○安全対策

- ・もともとボランティア団体なので自己責任的な所もあるのだが、森林内での活動は事故等の発生は不可避である。特に間伐等の森林整備では、万が一のことが起きる可能性もある。そういったことが起きたら団体としては解散せざるを得ないということもある。安全対策について、活動者への教育を含めてしっかり取り組んでいきたい。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

- ・林業もそうであるが、森林のことを知らない人が多いので、まずはこういった状況にあるのか知ることが大切と考える。
- ・協議会のメンバーは、個性豊かで、ボランティア精神も強いところもあるので手弁当的な活動でもある程度は活動している。願わくば、そういった人々をサポートするようなものがあればとも考える。
- ・メンバーの世代交代と関連して、森林のことをいかに伝えていく点で、森林所有者と森林に興味ある人をいかにくっつけるかというのも一つのカギではないかと考える。

写真



間伐材搬出の様子



協議会のメンバーと



小学生と間伐体験



下層植生の調査

その後、いかにお過ごしですか？プロジェクト



とよた森林学校



対応してくれた人の名前：北岡明彦
調査員：沖章枝 松井賢子 浅田益章
レポート作成者：浅田益章
取材日：2016年11月9日
取材場所：愛知県豊田市森林課（豊田市足助支所地内）

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

1. 人工林の間伐ができる人材の育成。
 2. 今までに森林や林業に関心がなかった森林所有者に森林や林業の基礎知識を解説する。
 3. 森林・林業の理解者などの「森の応援団」を増やす。
- 以上の目的のために年間14の講座を開いている。大きく分けて、「人材育成コース」と「森の応援団コース」の2コースがある。前者は本格的に人材を育成するコース、後者は市民が気軽に参加し、森林への理解を深めるコースになっている。特に「森の応援団コース」は人気が高く、抽選となる講座もある。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

（1）活動に変化なし。

- ①人工林の間伐ができる人材の育成
- ②関心の低い森林所有者への森林や林業の基礎知識の解説
- ③森林・林業の理解者などの「森の応援団」を増やす

2006年にスタートして以来、人材育成コースと森の応援団コースの2つの市民向け講座で林業や森林管理に携わるボランティア・就業者の育成を図る。都市部住民には自然観察や昆虫観察を通して森林や間伐への理解に努めてきた。

豊田市の市民42万人。せめて1割は講座に参加してほしい。そのためには間伐や森林への基本的な理解、普及が大事である。講座のプログラムはニーズに合わせて変えてゆきたい。

（2）最高賞受賞（2016年10月）

森林学校の10年に及ぶ活動が評価され、「間伐・間伐材利用促進ネットワーク」のコンクールで最高の林野庁長官賞を受賞した。

評価されたこと：

- ①市、森林組合、NPOの3者連携。取り組みの継続
- ②講座内容が充実している
- ③地域リーダーを養成し、将来につながる活動
- ④森の応援団の育成など都市部と中山間地をつなげる活動である

豊田市は市の7割を森林が占める。手入れされない人工林によって大きな水害が出た。（東海豪雨、2000年）都市部の安全も損なう。そのもとになるものが森林であり経済力を支える源である。豊田市は豊田市全体ビジョンとして考えている。国や県の施策と違ってきてても市にあったことをやる必要がある。地域ごとに森に対する価値が違うから。市が森林管理をきちんと主導する時代になっている。

(3) 人工林と天然林の違いを理解した森林管理

豊田市の森林地域は広い。天然林と自然林の違いを理解して森林管理をすることが肝要である。

- ・天然林は自然のままに。植林をする必要がない
- ・人工林は手を入れなければいけない。スギとヒノキ
- ・コナラは天然林も人工林もある。(しいたけの原木)

豊田市の高標高地における植生遷移の模式図で北岡さんに教えていただいた。

森林を完全に裸地化するとまず風散布型種子の草本植物が侵入し、いろんな樹木に移り変わりブナ林になる。

長い時間がかかって森林は成長することが模式図で分かった。

講座には自然観察の講師もいる。校長の藏治先生は林学だけど生態学もよくご存じである。

生態学を踏まえた林業、森林管理が大事である。

地域の変化

豊田市は広大な森林をバックに持つ先進的な工業都市である。都市部の市民と中山間地域の市民が生活している。都市部で働き、中山間地域に住まいを持つ市民もいる。自然豊かな地に住む先進工業都市と言える。都市部と中山間地の交流や補完による自然の恩恵を得ることが期待できます。クオリティーの高い暮らし方を得ることができる。

豊かな森に育てるためには人工林は管理を必要とします。広葉樹林などの自然林は保護、保全が重要である。林業だけでなく、暮らしを豊かに、楽しくするような多様な形の森林が求められるであろう。

これからやろうとしていること

北岡さんは現在、豊田市の森林課勤務である。近い将来の定年後のことを尋ねてみました。引き継ぐ後継者がいないと言われた。引き継ぐことなど簡単にできることではないとのこと。個人商店のようなもの。今は市営の森林学校であるが私営の森林学校をやりたいと言われた。子供たちが喜んでくれるのが楽しい。トヨタの森に対する情熱と愛情を強く感じました。そういう人がいないと森は守れないとも感じました。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

とよたの森林学校の事例は、隣接する岡崎市の森づくりや森林管理などに大いに参考になるものである。今回一緒に訪問した沖さんは岡崎市に働きかけているとのこと。そのときにこの事例集は大いに役立つのではないかと思います。

写真



① 香嵐溪(豊田市足助町)



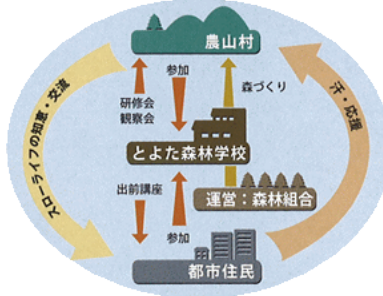
② 豊田市森林課(足助支所地内)



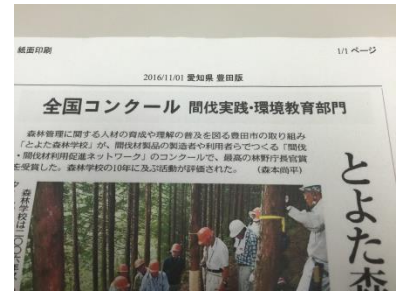
③ 森の応援団育成ポスター



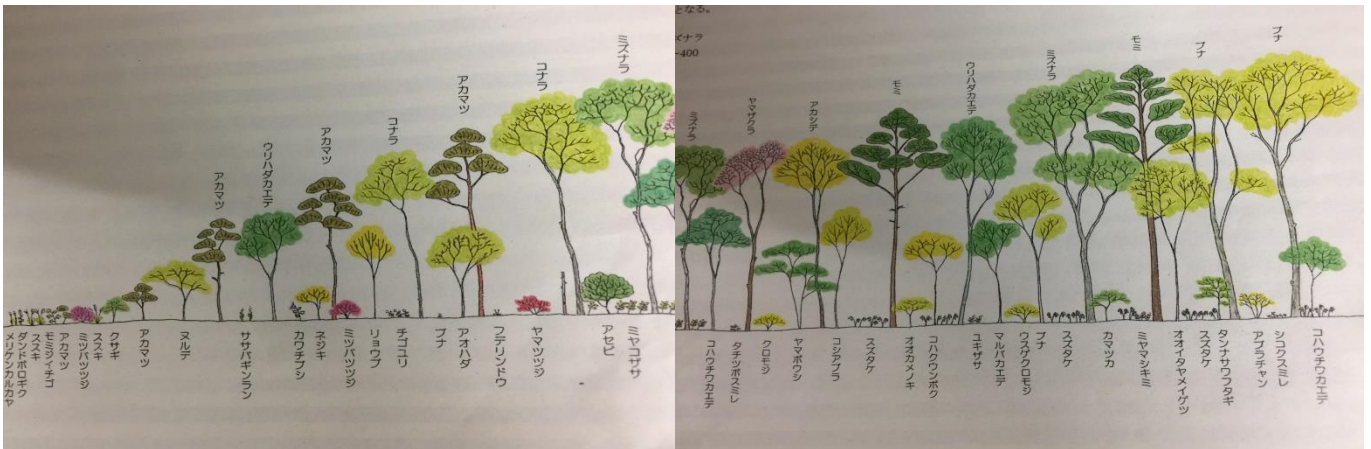
④ 対応していただいた北岡さん



⑤ 特徴:校舎のない学校 (HPより)



⑥ 全国コンクール最高賞受賞



⑦ 豊田市の高標高地における植生遷移の模式図(安定したブナ林になるまでに)

その後いかに経過していますか？プロジェクト



とよた森林学校OB会



対応してくれた人の名前：山本薫久

調査員：松井賢子

レポート作成者：松井賢子

取材日：2016年11月8日

取材場所：とよた都市農山村交流ネットワーク事務所

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

『とよた森林学校』の修了生たちが任意に集まり、OB会として組織化した。幹事は、山主から2人、観察リーダーから2人、森林ボランティアから2人、その他から2人を選んで、多様な人に担ってもらうようにしている。

●自然観察会：リピーターの受け皿として、そして森林学校ではカバーできない地域外のフィールドなどで、自然観察会を行っている。また、「樹木観察会」は、この地域の樹木を学習する趣旨で開講している。

●間伐モニタリング調査：間伐ボランティアが施業した場所の間伐前、間伐後の推移を調査している。

●間伐技術ステップアップ講座：森林ボランティアの技術向上のための講座を行っている。

●木工教室：間伐材でベンチを作っている。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

NPO法人「都市と農山村交流スローライフセンター」が事務局の中心になり数年活動してきたが、数年前からOB会の幹事さん自らが事務局的な活動をしてきて、今では多くのメンバーが運営に直接参加してきている。年4回発行する「OB会だより」の原稿や写真も積極的に集め、編集もプロ級の腕前をもつ方が受け持っている。

また、観察会などの担当も分担し、当日の出欠・会費納入・案内も分担している。文字通り、OB会の幹事のみさんの自治で運営されている。

最近の活動(矢作新報2016年4月の記事より)

「元気な森林市民活動！・・OB会」

山本薫久

2016. 4月

知っているでしょうか。ある同窓会が元気なのです。しかも、みんな森林が大好きで、樹木の勉強や森林の保全の取り組みをしていたりしています。しかし、大学の林学科のOB会ではないのです。

それは「とよた森林学校OB会」。豊田市主催、豊田森林組合運営の「とよた森林学校」。その卒業生たちが自主的に作っているもの。

そもそもの「とよた森林学校」をご存知の方は多いと思いますが…。毎年約15の講座を開設していて、今年度で10周年。そうです。豊田市が農山村地域と合併した直後に開設された「学校」なのです。セミプロ林業作業員養成講座(約10回講座)や間伐ボランティア初級講座(2泊3日の講座)など「人材育成コース」と、森林の草花調べ(3回講座)や森と人の文化史(3回講座)など「森の応援団コース」の2種類があります。

その卒業生たちが6年前に結成したのが「とよた森林学校OB会」なのです。それ以前にも二つの森林市民活動グループがありました。間伐ボランティア初級講座(森林学校開設前の旧豊田市主催の森林塾も含め)の卒業生は矢作川水系森林ボランティア協議会関係の森林ボランティアとして活躍していました。そして、森林観察リーダー養成講座の卒業生も「森もり会」というグループを作って活動していました。

しかし、その二つのグループを含め、とよた森林学校だけでは満足できない「市民パワー」が、財源も運営も自分たちでやろうと立ち上がったのです。年会費千円で188人の会員。27年度だけでも15企画のべ500人の参加。独自の「OB会だより」4回発行。山主・森林ボランティア・観察リーダー・木使いの各分野からの人材で構成される幹事会は11回。ますます自治力を高めています。乞うご期待！



その後いかにお過ごしですか？ プロジェクト



とよた都市農山村交流ネットワーク



対応してくれた人の名前：山本薫久(代表)
 調査員：沖 章枝、松井賢子
 レポート作成者：沖 章枝
 取材日：2016年11月8日
 取材場所：とよた都市農山村交流ネットワーク事務所



活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

活動の目的は、都市と農山村が交流する場をつくることによって、都市部の人たちに農山村の魅力を伝えるとともに農山村を活性化すること。足助、旭、稲武、下山、小原、松平など豊田市の農山村域でさまざまな交流事業をしてきた。旧町村ごとに地域会(6地域会)を組織し、幹事が集まり毎月打ち合わせを行っている。農都交流の取り組み、都市と農山村のネットワークを構築し推進する組織が、とよた都市農山村交流ネットワーク。もっとも力を入れている活動は「セカンドスクール事業」。ひとつは、豊田市内の希望する小学校が行事として2泊3日の農山村体験をするというもの。小学生3人から4人で1軒の農家に泊まり、3日間は田舎の子になる。野菜が大好きになったり、食事作りや後片付けが当たり前になったり、保護者がびっくりするほど子どもたちにより影響を与えている。もうひとつは、希望する小学生が2泊3日や1泊2日で農山村体験できるフリー版を実施している。毎回希望者が殺到し、事業の拡大を目指している。2013年度は約250人の小学生が参加した。その他、広く大人を対象に行っている事業として、農業体験、山里の料理・道具などを手作りする山里の知恵を学ぶ講座、森林の恵みを体験する講座など、多彩な講座を開き、都市の人々が農山村に触れる機会を提供している。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

○おいでん・さんそんセンター発足による活動内容の変化

活動目的の一つの柱であった農山村と都市交流の取り組み・推進は、「おいでん・さんそんセンター」が発足して、とよた都市農山村交流ネットワークの役割としては終了した。「おいでん・さんそんセンター」自身は各団体の活動を基盤にして展開され、今までとよた都市農山村交流ネットワークがやっていた各種事業は「おいでん・さんそんセンター」が推進させている。

しかし、都市農山村交流事業の一つである『セカンドスクール事業』は、現在、とよた都市農山村交流ネットワークの中心的事業として継続している。そればかりか、『セカンドスクール事業』はここ数年さらに発展してきている。1泊2日換算で2012年度は234人の参加であったが、その後300人を超え、2015年度では378人(2012年度の1.6倍)にまで増えてきている。かつては学校単位(5年生対象)の参加だけであったものを、夏休みや春休みには、希望する小学生を対象に豊田市農山村部で受け入れるという「セカンドスクール・フリー版」を実施したことによる成果だといえる。

その他の事業は、とよた都市農山村交流ネットワークとしては中心になってはいないが、かつての関係者と「おいでん・さんそんセンター」などと共に進めている。例えば、広く大人を対象に行っている事業として、農業体験、山里の料理、道具などを手作りする山里の知恵を学ぶ講座、森林の恵みを体験する講座など、多彩な講座を開き、都市の人々が農山村に触れる実践的機会を提供している。

実行委員会をつくって、農山村の地域で活動する様々な団体やグループと、「ほんわか里山交流まつり」、豊田の市街地のど真ん中で「いなかとまちの文化祭」を開催している。延べ数千人の参加を得ている。これらの取り組みによって、多くの市民に暮らしの原点である農山村の自然、営み、文化に注目をしていただいている。

とよた都市農山村交流ネットワークと目的や事業内容がほとんど一致している「おいでん・さんそんセンター」によって、市の組織として都市農山村交流が進められている。このため、高度な協力体制が可能になり、農山村交流の取り組みが活発になってきた。

『セカンドスクール事業』では豊田市教育委員会の協力を得て、未来の山村を担う次世代教育となっている。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

都市農山村交流が進んでいると手ごたえを感じている。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

いろんなところでみなさんがもうやっておられるので、一緒になってやれば良いと思う。豊田市で完結するのではなく、根羽村とか設楽町とか恵那市とかと結びつくのが大事。この地域は山も海も都会も近いので、年に一回は「流域圏祭り」と称して、事例集に載っておられる団体の交流と市民へのアピールをしていったらどうだろうか。

海・川・山での様々な方々の営みがリアルに体感できる場になるといいと思う。やりやすいと思う。流域圏全体が結びついて一緒にやっていきたいと思っている。

写真



セカンドスクール・夏休みフリー版「山っ子くらぶ」



セカンドスクール・学校版

その後いかにあつたごいですか？プロジェクト



豊森なりわい塾



対応してくれた人の名前：中川恵子
 調査員：丹羽健司
 レポート作成者：丹羽健司
 取材日：2017年2月19日
 取材場所：豊森なりわい塾事務所(名古屋)

活動内容(3年前)

取材対応者の中川氏によれば、豊森の活動が何であるかは単に断言しにくく、あえて言うならば豊森的な幸福論を共有し追求する場であるという。塾内において「豊森的」という合言葉を共有しつつも、「豊森的」とはどういう状態であるかを自問し、塾生と塾自体が共に成長している様子が伺えた。

通称「とよもり」、豊森なりわい塾は豊田市、トヨタ自動車株式会社、NPO法人未来・志援センターの三者の協働で行っているプロジェクトである。森林および里山を学びの場とし、人と地域づくりを考え、それらを活用する仕組みづくりと担い手を創出していく活動を行っている。塾生には都市部や里山地域から、学生やトヨタ自動車の社員など、老若男女が集っている。今期が3期目となり2009年から5年目の活動となる。

塾生たちは毎回の講座で、地域コミュニティの暮らしや経済など、特に森林と共に生活する里山の問題点などを学び議論を深める。さらには、実践的なアイデアを持ち寄り、住民たちと共に里山の生活に活用するような取り組みまでも行う。過去の塾生の中には、ただ学ぶだけでなく、実際に里山での生活を選択し、移住を決意した者も少なくない。

このような議論の中で形成されるのが、彼らが口にする豊森的な活動である。豊森的な活動とは、様々なフィールドの人間たちが、それぞれの思いで、森林と里山について語り合い、実践に移していくことであるのだろう。まるで様々な色の絵の具で描かれた、一つの里山の風景が目に見えようである。そこには森と里を生業とする人間たちが活き活きと存在している。

3年間で変化したこと

- ・基本的なプログラムはずっとほとんど変わらないが、豊田市旭地区に根を張ったことから、活動と成果のつながりが見えるようになった。
- ・「ああ、豊森さんね」と住民にも行政にも当たり前に周知されるようになった。
- ・トヨタ社員や市職員が増加した。
- ・募集の苦労が少なくなった。多数の応募から「よい人」「適う人」を選別する必要はないのではと思えるようになった。主催側に、誰でも受け入れられる懐(経験蓄積)ができたと同時に、参加者の多様性や問題解決能力を信頼するようになった。
- ・成果を参加者自らが「飛び降りる」(ドロップアウトする)か、「しない」という生き方の二者択一的なものに見ていた傾向があったのが、多様な価値観をゆったりと認めあえるようになった。
- ・塾生は「もやもや」を解消したくて参加するのだが、結局、モヤモヤは解消できない。しかし、「モヤモヤが何かがあった」と言う。それでいいと思えるようになった。これまで輩出してきた先輩たちの生きる姿を見ることによっても、そう思えるのだろう。これは、ここで輩出してきた修了生100人以上(8年間)の生き方の蓄積のなせる業だと思う。

現在直面している課題

* 運営の勘どころ

- ・プログラムづくり、参加者、接触する地域などの調整ごとや、スキマを埋めていくのがスタッフの仕事。
- ・講座以外の時の塾生や地域へのサポートも大事

* 課題

- ・これは緩やかで確実な社会変革運動。成果としての塾生を輩出し続けることはできるだろうが、その運営を担い持続させるスタッフをどう育成していくか？

* 醍醐味

- ・みんなが「よかった」を共有でき、それが一瞬にして連鎖していくプロセスに立ち会えた時。

取材者感想

* 取材者感想

これまで1期ずつを重ねてきたことの自信が、参加者への深い愛情になって投影されていく。それが繰り返されて「そのままでいいんだよ」という安心感を生み、参加者を解き放っているように映った。いつまでも続ける覚悟か、いつかやめる覚悟か、気持ちのいいことはなかなかやめられないゆえの苦悩もあると思った。

写真



目的／ねらい

- 1) これまでの4回の講座を振り返り、かつての地域の暮らしを成り立たせていた諸要素(自治や世界観(宇宙観)、ワークライフバランス(くらしとめかせぎの関係性))と、現在のそれらの関係について考える
- 2) 新しい生き方の実例として、旭にITターンした戸田さんの生き方を学ぶ
- 3) 半農半Xをキーワードに、塾生が自分自身について掘り下げ、これからの生き方・働き方・幸せを考える
- 4) 自分の課題や思いを仲間と共有することで、塾生同士の関係性をより深め、塾という学びの場をより主体的なものとする

	1日目	2日目
午前	グループトーク「これまでの学びを振り返る」	間書きグループワーク レクチャー「半農半Xという生き方」ゲスト・塩見直樹さん
午後	レクチャー「くらし・かせぎ・つとめを考える」駒宮博男 トークセッション「集落の暮らしとこれからの生き方を考える」	ワークショップ「自分のXを考える」



その後いかにあつたごいですか？プロジェクト



株式会社 M-easy



対応してくれた人の名前：戸田友介
 調査員：眞木宏哉、浜口美穂
 レポート作成者：浜口美穂
 取材日：2016年11月24日
 取材場所：福蔵寺内 M-easy事務所

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

●活動の経緯

戸田さんが名古屋大学の学生だった当時、大学、学生、経営者の有志が集まってこれからの社会のあり方について議論する「ひと循環型社会支援機構」に参加。これをきっかけに、「これから農業がどんどん衰退していき、自分たちの時代は、安心して食べられるものがなくなってしまうかもしれない！」と思い立ち、若者による農業をベースにした未来づくりをすることを掲げて、同機構の支援も受け、学生を中心に同社を設立した。

2006年から常滑で有機無農薬野菜の生産を開始。縁あって地域のおばちゃんたちの自家用野菜も一緒に名古屋市内を中心にひき売りを行うようになり、2008年に「やさい安心くらぶ」を立ち上げた。これらの事業は2013年10月末に同社から独立。

2009年9月～2011年3月末まで、豊田市旧旭町で「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」(若者PJ)を豊田市、東京大学と連携して実施。10名の若者が旭地区に移り住み、安心安全な農業を中心に山里の暮らしを体験。さまざまな価値観の相違などの困難を経て、山里の豊かな自然環境、豊かな人間関係、豊かな暮らしなど「ここには価値あるものがあって、それを表現することが、自分たちの暮らしにつながる」ことに気づいた。

結果、7人が独立して移住。現在は、時につながりながら、福蔵寺の境内でご縁市を開いたり、米や大豆や餅や綿をみんなで作る「まるっこくらぶ～みんなで作ってみんなでわける野良仕事～」などを実施している。また、都市の人・団体などを受け入れ、山里の体験を提供する講座も実施。2013年3月には「生きるを考える講座」を行った。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

<戸田さん自身>

●毎年3割くらい変化していく

前回の取材(2013年11月)時にモットーは「生き方、暮らし方を問い続けながら、ライフステージに合わせた活動を行っている」ということだったが、その通り、毎年変化を続けながら、100を超える「暮らしのシゴト」に取り組んでいる。

●「暮らしのリズム」が刻めるように

2011年に移住して、3年で「暮らしのリズム」が刻めるようになってきた。時間のリズムに関しては、「充足感、幸福感、稼ぎなどが湧き上がる『重なり合い』を育むための予定を入れる」など、戸田流ポイントがいくつかある。

<働き方がテーマ>

●薪づくりと薪の販売

事例集Ⅲで紹介されている「あさひ薪づくり研究会」の事務局長をしている戸田さん。「旭木の駅プロジェクト」から原木、あるいは玉切りにした材(2割多いモリ券を出す)を薪づくり研究会が仕入れて加工、M-easyが配達を担当する仕組みで回っている。長野県の薪ストーブ販売会社DLDとも提携し、薪ストーブユーザーへ配達。2017年には、薪づくり研究会の仕入れ・加工とM-easyの配達を合体させ、有限責任事業組合の形で法人化の予定。薪の配達はコミュニケーションの機会にもなり、米を作っているスタッフとお客さんの世間話から「じゃあ、お米も配達して」ということもあるとか。

また、旭地区の鉄工所と1ターンの若者が協働して、薪ストーブ民主化プロジェクトも始まっている。

●小渡・小原販売店「戸田新聞店」営業スタート

高齢化で続けられない旭地区・小原地区の新聞店の事業を引き継いで、2015年にスタート。中日、朝日、日経など読売新聞以外の新聞を配達している。また、新聞店のFacebookも開設し、地元の新聞記事や新聞折り込みチラシを掲載している。35人の配達スタッフがフレキシブルに働けるようシフトを組んでいる。チラシを折り込むのは女性3～4人がシフトを組んで担当。新聞配達の仕事と野良仕事を組み合わせるなど、各人が自分の時間を有効につかって働くことができるよう考えている。それは薪の配達も同じ。移住者の仕事にもなっている。毎月、「Staff Press」も発行。

<ものづくりと仲間づくり>

●電動軽トラ改造計画「暮らしっくCarをつくろう♪」主催

2014年から、軽トラを電気自動車に改造する講座を開催している。トヨタ自動車の技術者などがボランティアとして参加し、キットを用い、公道を走ることができる電気自動車づくりのノウハウを学んでいる。

●山里合唱団「こだま」発足

2014年に発足。Iターンしたプロのソプラノ歌手が指導。月に2回、福蔵寺で練習をしている。練習の前には子どもたちも一緒にみんなで夕飯を食べておしゃべり。地域の文化祭や老人会、福蔵寺ご縁市などで披露している。

●「やさしい暮らし委員会」設立

2016年に設立。「あさひごよみ」「あさひめくり」の制作を行っている。「あさひごよみ」は、高齢者施設の利用者の貼り絵作品を中央に大きく使用。高齢者施設の利用者と地域とのつながりが切れないようにとの配慮がある。毎月、新聞に折り込んでい。「あさひめくり」は、365人以上の多様な人たちが関わって、めくるたびに旭を感じられる日めくりとして、2017年版から発行を始める。

●常に変化する福蔵寺のご縁市

6年目。年3回開催し、毎回400人ほどが集まる。車が渋滞するので、最近は1週間前にしか宣伝しない。人が加わることで常に変化している。やりたい人がやりたいようにするのがポイント。

地域の変化

●若い移住者がうなぎのぼり

この5年で毎年10世帯前後の移住者がある。こども園では定員を超える希望があり、対応を検討している。

●移住文化を築いてきた

「あさひ若者会」(事例集Ⅱに掲載)発行の「シトルカン」で移住者に地域の魅力も語れるように。子育て世代の移住者が増え、「移住者が地域の担い手になる」という文化が根付いてきた。移住者同士のネットワーク、地元側のネットワークも広がっていて、必要なときにつながっていける状態に。

これからやろうとしていること

●参加型ものづくりによるいなかの人材結集拠点づくり

持続可能な暮らしを求める若者、担い手不足に直面する地域住民、企業でものづくり技能を培ってきた中高年など、様々な人がものづくりをしながら交流できる拠点をつくりたいと考えている。子どもも巻き込み、子どもたちに大人が生き生きと働く姿を見せる教育の場にもなるようにしたい。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

この情報をウェブやFacebookなどでもっと外に発信できないか。地図上にプロットしたり、地域別、テーマ別にインデックスをつけたりして、見る人が必要な情報にたどり着きやすいように。



父の働く姿を見てのびのび育つ宗介くん



あさひごよみ



Staff Press



その後いかにお過ごしですか？プロジェクト

旭木の駅プロジェクト



対応してくれた人の名前：旭木の駅プロジェクト実行委員会代表 高山治朗
調査員：浜口美穂、眞木宏哉
レポート作成者：眞木宏哉
取材日：2016年11月24日
取材場所：高山さんのご自宅

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

「木の駅プロジェクト」は、伐り置き間伐により山に放置されている材を山から出し、土場まで運べば、1トン（軽トラ約2杯分）で6,000円相当の地域通貨「モリ券」が対価として得られるという仕組み。2009年に岐阜県恵那市で始まり、現在、全国で約40カ所に広がっている。旭地区は2011年3月、全国で3番目にまずは社会実験として取り組みを始めた。

●背景

2005年に矢作川流域圏の町村を合併した豊田市は、2007年に豊田市森づくり条例を制定し、森林所有者と市、森林組合が一体となって間伐する「森づくりの団地化戦略」を進めている。また、市民側でも「森の健康診断」に取り組むなどの動きがあり、その流れの中で、木の駅プロジェクトが立ち上がった。

●プロジェクトの流れ「旭木の駅プロジェクト」の流れを紹介しよう。

- ①出荷したい人はまず実行委員会に登録する。
- ②放置材あるいは間伐した木を山から搬出し、土場に持ち込む。出荷樹種は柿の木以外は何でもOK。長さ50～210cmまで、末口直径5cm以上。
- ③土場には登録者の札が立っていて、その前に積む。
- ④自分で出荷材の長さや末口直径を計測し、事務局に申告。（第1～4回までは体積×比重0.8で重量を出していたが、第5回は比重0.75で計算）
- ⑤事務局から、1トンあたり6,000円相当の地域通貨「モリ券」（1モリ＝1,000円）が発行される。
- ⑥モリ券は地元の登録店のみで使える。登録店は、飲み屋、温泉、食料品店、床屋、森林組合、ガソリンスタンド、コンビニなど多種多様。
- ⑦出荷材は、名古屋港木材倉庫（株）が1トン3,000円で買い取り、チップに製品化される。

●これまでの結果

第1回（2011年3月）、第2回（2011年11月～12月）、第3回（2012年2月～3月）、第4回（2013年11月～2014年3月）、現在、第5回目（2013年11月～2014年3月）実施中。3回目に、森づくり団地（豊田市施策）の伐り置き材の出荷などにより、出荷量が飛躍的に増え、第4回の出荷量は350トンに及んだ。出荷者数は53人、登録商店数は34店舗。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

●事業実績

- ・2010年3月に第1回の活動を開始以来、8回目(2016年11月～2017年3月)を迎えている。
- ・登録出荷者60名、登録店36店。発足時から出荷者数は2倍半、商店数は倍増している。
- ・出荷量は、第1回の90トンが2015－2016年の第7回には485トンに達した。
- ・重量(t)／体積(m³)の換算率を0.75から0.7へ切り下げている。

●行政からの支援

- ・豊田市からの「負担金」(旭支所のワクワク地域事業)による支援は、トン数比例で50万円→70万円→80万円→90万円→50万円と推移してきたが、5年間の時限措置なので、第7回をもって終了した。
- ・代わって新方式(「事務費補助」)による支援が開始されることになった。これは行政の担うべき地域振興事業を木の駅プロジェクトが肩代わりしている事実が評価されたものである。

●新たな収益事業へのチャレンジ

- ・薪販売 3年前から手がけてきたが、いよいよ第8回から本格的に始めることになった。
「旭まきづくり研究会」と連携し、高遠のストーブ会社の名古屋市内「薪宅配サービス業務」を受託する。
木の駅で集荷・乾燥させた間伐材を16,000円～17,000円／で供給。目標は50軒100m³(現在40軒)。材長を45cmの倍数とし、山主の元まで取りに行く。
- ・ペレット生産
都市内住宅におけるペレット・ストーブの需要を見越して、研究・検討中。高知県橋原町のペレット事業を見学した。

●育林事業を始める

市の旭地区わくわく事業に選ばれた事業に取り組んでいる。

・旭地区育林推進事業

小中学生から始まって山主・林業従事者などを対象に、森林再生と森林資源活用の大切さを啓発する事業。育林事業あさひ根っこ会を立ち上げ、豊田森林組合など5団体と共に協力支援している。小学生には、木に触れ、森を体感してもらう森林体験イベントを実施している。

・あさひ森の健康診断事業

「子ども森の健康診断」ではマイクロバスの運行提供などを、中学生には、「東大生と一緒にできる」をキャッチフレーズに参加を呼びかけている。

写真



高山さんのご自宅にて



前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

<取材時の課題>

5回目でマンネリ化しつつある。新たなモチベーションが必要。

- 旭木の駅プロジェクトの基本理念でもある「旭地区の森を元気に！人を元気に！」へ改めて回帰する取り組みが始まっている。
上記で紹介した「育林推進事業」や「森の健康診断事業」がその一例である。
これらは、山主が「自らのために行う事業」から「旭という地域社会に働きかける事業」へと視野を拡大した行動として捉えられている。
一方では、薪販売事業にも着手しているが、高山代表の語られた「『木の駅』は負を覚悟の活動であり、薪は稼いでゆく事業だ。」という言葉が印象的であった。

逆ザヤ分を埋める付加価値の高い販路とその多様化が必要。

- 上記で紹介したとおり、市からの負担金支出の終了に伴い、新たな事務費補助が始まったことは朗報だが、さらに加えて、前回の問題提起のように独自の収益事業の開発は必須の条件であろう。
こうして新たな戦略として「薪販売」と「ペレット生産」が着目されている。
「薪」については、具体的な事業着手により、「稼ぐ事業体」をめざす一歩が始まっている。

<現在の課題>

赤字は山主有志が身体で埋めよう。

- 上記のような取り組みも現状では逆ざや解消につながらない。この赤字は会員の「志材」によって埋められる予定であるという。旭地区でも、「森づくり会議」の活動が進み、不在地主の持山が判明するようになったので、切り捨て間伐で放置される材を「木の駅」で貰い受け、出荷している。つまり、木の駅出荷者有志が自らの身体でプロジェクトのために稼いでいるのだ。志材搬出は月1回。目標は、30万円、50トン。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

- 流域圏全体でのネットワーク化はなかなか難しいと思うが、地域事例の情報インデックスがあればありがたい。
- 交流会のような場があれば参加したい。

写真



旭地区林育推進事業のポスターを
小学生に書いてもらっている



土場

その後、いかにお過ごしですか？ プロジェクト



green maman



対応してくれた人の名前：宇角佳笑、小松昌世、小黑敦子
 調査員：蜂須賀功、井上崇也
 レポート作成者：井上崇也
 取材日：2016年12月6日(火)
 取材場所：守綱寺

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

green mamanは、朝市を毎月第4火曜日、豊田市寺部町の守綱寺で行っている。また、スーパーやまのぶ梅坪店「ママンズ キッチン ことり」では、惣菜や弁当、おやつなどを販売し、「green mamanのお気に入り」では、フェアトレード商品や朝市での商品を販売している。2014年1月からは、毎月第2木曜日に、タキソウ家具本店での朝市も開催している。

子育て中の主婦、宇角さん、中根さん、小松さんおよび小黑さんの4人が、田中優さん(反原発や平和活動が続ける文筆家)の講演を聞き、「私たちにも何かできるのではないか」という思いから、green mamanは始まった。「地域で循環」をもとに、エネルギー、人、お金、モノが地域でうまく回るような仕組み、持続可能な社会をつくろうと、まず、農業すなわち「食」からスタートする。

朝市を企画運営し、地域で野菜を作っている人(農業生産者)に出店してもらい、地域の人に野菜を売ろうとしたが、当時豊田市内では産地直売が中学校区単位で進んでおり、なかなかgreen mamanの野菜は売れなかった。そこで、ただ売るのでなく、商品の情報(作っている場所、人)や料理方法、「買い物は投票」という考えなどを併せて紹介するうちに、徐々に浸透していき、現在では野菜、米、パン、ジャムなどの食料品に加え、雑貨なども朝市で出店されている。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

毎月第2木曜日に開催していたタキソウ朝市を2年ほどやって卒業

→単純に売買だけではない目的でやっていたが、そのあたりのお互いの思惑が違っていた。

・猿投地区で自然栽培にこだわった米づくりを行っている。「みどりの里」の方の指導やその土地の方々からの受け入れがあったからこそ出来た。

→やってわかる1から作る大変さ、意識の変革があった。米価格の異常な安さ、消費者目線と生産者目線の違いを思い知らされた。今では、外部の人も加わり一緒に作業している。そこから別のコミュニティが発生することを期待している。

・スーパーやまのぶにgreen mamanのコーナーを設けさせてもらっている中、スーパーやまのぶと老人福祉センターぬくもりの里が福祉事業の一環として入居者が生産している農産物の取り次ぎを行ったこともある。お互いに顔が効くgreen mamanだから出来たことだと思う。今後は、一般の人が農業を通じてお金だけじゃない価値観を持てるような農福連携が重要になってくると思う。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？ 現在の課題は何ですか？

・運営費については、大変ではなくなってきた。逆に周りが出店料が少額で、運営を心配してくる。スーパーやまのぶの相談役が協力を申し出てください、やまのぶ2店舗にgreen mamanコーナーを設ける事で支援を頂いている。

・助成金を初年度申請し、大変助かったが、次年度からは申請の労力を考えて、申請していない。

・朝市に参加してくれる人に偏りが出てきている。来ていない人への伝え方も考えていかなければならない。

・フェアトレード商品の売り買いの難しさ

・フェイスブックのページ作成

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

・誰かと誰かをつなげ、コーディネートしてくれる存在、特にそれを仕事でやってくれる人が必要と感じる。豊田市で言えば、おいでんさんそんセンター。行政はイベントをやりがちだが、やっている側としては、単発では効果がわかりづらい。細くでも長く続けて付き合っていくことに自らの活動が役立っていることを実感できる場合が多い。

写真



朝市の様子(守綱寺にて)



田んぼの除草作業

その後いかにお過ごしですか？プロジェクト



農業生産法人 みどりの里



対応してくれた人の名前：野中慎吾

調査員：蜂須賀功

レポート作成者：蜂須賀功

取材日：2016年11月18日

取材場所：農業生産法人 みどりの里 事務所

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

スーパーやまのぶの山中勲氏が社長から会長に就任する際に、安全安心な食品を自前で提供したいという思いから、山中氏が退職金を投じて農業生産法人を立ち上げた。代表は山中氏で、社員は野中夫婦のほか2人おり、合計4人いる。

農薬、肥料を使わずに主に米、イチゴ等を栽培し、スーパーやまのぶ梅坪店の「ごんべいの里」(添加物・化学肥料・農薬などをできるだけ少なく、または使用しない商品)で主に販売している。

一般のほとんどの農家では収穫量の増加、農作業の効率化、市場への規格適合のため、農薬や肥料を使っているが、みどりの里では無農薬、無肥料を通じ、作物の本来持っている生命力、おいしさを引き出し、人間の体に良い農業を行っている。そのため、草取りや土壌管理などに苦勞するが、毎年試行錯誤を重ね、自然栽培の確立に取り組んでいる。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

2013年11月の取材以後、自然栽培による農業を障がい者と一緒に取り組むようになった。また、green mamanさんが農業をする際にもお手伝いをするようになった。

○ 障がい者との関わり「農福連携」

これまでパートさんに農作業をやってもらっていたが、株式会社ストレートアライブさんが運営する就労継続支援A型事業所「とものわ」さんに農作業を委託し、障がい者の方に農業をやってもらっている。当初は、農作業がしっかり行えるかどうか不安であったが、試行錯誤を繰り返すうちに、今では障がい者の方の農作業のペースが非常に速くなり、感心している。その後、「無門福祉会」さんにも農作業を委託するようになり、現在では、ストレートアライブさんが1チーム、無門福祉会さんが2チーム、1チーム当たりの人数は6、7名なので、合計約20名の方が農作業を行っていて、みどりの里にとっては障がい者は欠かせない重要な存在である。

○ green mamanさんとの連携

green maman(豊田市在住の4人の母親が集まって作ったグループ。環境問題等に取り組み、朝市を毎月開催している。)さんが行う自然栽培の農業(田んぼ等を4反)を指導している。自分で米を作ることにより、いかに米を作ることが大変かを肌で感じてもらい、生産者の苦勞を体験し、自然栽培の価値を理解してもらっている。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

「農福連携」により、人手の問題が改善されると同時に、障がい者又は福祉事業所にとってもメリットが生じた。「農福連携」は、農業、福祉の両方にメリットがある「win win」の関係である。

- ・ 農業にとっては、人手がいない、人を雇えない、拡大することが難しい、なかなか休みが取れないなどの問題があったが、福祉との連携により、人手の問題が改善され、生産量も上がった。
- ・ 福祉にとっては、障がい者の働く場があまりなく、社会との関わりも薄く、どちらかという社会の片隅に追いやられているような感じで、障がい者もスタッフもモチベーションが低かったが、農業との連携により、雇用が生じ、農産物を通じ社会との関わりが生まれ、障がい者も生きがいを感じられるようになった。

- ・ 農福連携のポイントは、まず障がい者ができるところから、すなわち何ができるかを探しながら行うことが大切である。また、作業の対価をお金でなく、現物(農産物)とすることで、お金だと作業をしてもこの程度しかもらえないのかと感ずることもあるが、農産物を渡すことで、それを親族や友人など関係者に渡したり、時には販売したりするなど自分で活用でき、やりがいが出てくるようになった。
 - ・ そして、障がい者自身も農作業を行うことで、障がい者が服用している薬の量も減り、体調もよくなるなど、農業が人体に良い影響を与えていることがわかった。
- ⇒ 「農福連携」はこれに関わる全ての関係者に恩恵をもたらすので、これからもさらに続けていきたい。また、今後は農福連携の障がい者だけでなく、green mamanさんのような主婦、子供などみんなで、自然栽培による農業を盛り上げていきたい。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

山村再生に関するイベントを開催したときの団体紹介や、山村再生の協力者を探すときに活用できると思います。要は、山村再生活動のツールとして事例集を活用してはどうでしょうか。

写真



障がい者によるサツマイモの苗植え付け



きゅうりの選別が上手な障がい者



ストリートライブさん、無門福祉会さん



green maman・障がい者と一緒に種もみ準備



green maman・障がい者と一緒にイチゴの定植え



green mamanとハイ、チーズ。お疲れ様でした。

その後いかにお過ごしですか？ プロジェクト



NPO法人中部猟踊会



対応してくれた人の名前：理事長 日浅 一
 調査員：唐澤晋平
 レポート作成者：唐澤晋平
 取材日：2016年11月14日
 取材場所：NPO法人中部猟踊会 解体所

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

看板は有害鳥獣駆除だが、額田の山の幸のありがたさを地域と子ども世代に伝えることが本筋。身の丈に合った解体所を、助成金に頼ることなく自力で設置している。鳥獣という資源保続(子獣は逃げる)を目的とした捕獲檻を開発し、2件の特許を取得している。この特許は誰でも自由に使えるようにしている。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

田畑に防獣柵が施されたことでイノシシが都市部へと拡散・拡大してきている(筆者注:この2~3年、国の補助で額田の農地に防獣柵の設置が進められている)。一方で田畑の被害が減ったことで地域住民もしっかり対策しようという意識が薄れてきていて、捕獲檻をあまり真剣にやらなくなってきた。行政も地域住民も、関わる人の意識がないといけない。

野生鳥獣は冬を越すのが生存のハードルだが、温暖化の影響で増えやすい環境を人間自身が作り出してしまっている。人間が管理者として調整をしていかななくてはならない。とにかく一番難しいのは人間。人間に比べればイノシシやシカやサルなんてかわいいもの。何ごとも利益追求と効率主義になってきていて、思いやりがなくなっている。野生鳥獣や身近な自然とどう関わっていくのか、地域の人がよく考えればうまくいく道もあるはず。大工場が来るような派手な話ではなくても、今地域にいる人たちが落ち着いて暮らしていける程度にはできる。

ソーセージ、燻製、生ハムなど加工品の商品開発テストはずっと続けている。イノシシの旬は冬場だが、農作物の被害が出る夏場によく捕まえられる。夏場の肉を活用しようとソーセージ等に加工することを始めた。自分のところははじめからイノシシ100%でやっている。以前は豚肉を混ぜた商品が多く出回っていたが、最近は同じようにイノシシ肉だけのものも見かけるようになった。加工品のノウハウは九州や岐阜の仲間と共有して、製品化されているものもある。前は内臓や骨を産廃として処分していたが、今はレストランと提携してできるだけ活用できるようにしている。

ジビエがもてはやされる傾向が続いているが、石器時代や縄文時代から日本人はイノシシやシカを食べてきている。それを家畜化してきて今の暮らしがある一方で、いまさらジビエといって盛り立てるのは無農薬野菜と同じような流れだと感じる。一時的な流行で欧米のまねごとをする必要はない。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

後継者については若い人が出入りして技術を身につけてきているが、補助金がなくても自立できる仕組みがないと難しい。人件費が稼げないようでは続かない。何をやるにせよ、最後は自立・自営をどうするか。儲かる話になってくるといろいろな人が近づいてくるが、他人に頼ってはい続かない。



日浅氏とちょうど解体中だった猪。



処理済みの鹿肉。汁物にするとおいしいとのこと。



解体所内は所狭しと冷蔵庫や食肉加工機械が並ぶ。

その後いかにお過ごしですか？ プロジェクト



岡崎森林組合



対応してくれた人の名前：組合長 眞木宏哉

調査員：唐澤晋平、蜂須賀 功

レポート作成者：唐澤晋平

取材日：2016年12月12日

取材場所：岡崎森林組合

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

人口、約38万人の岡崎市は古い城下町だが、23,300haに上る森林を擁する「森林都市」でもある。当組合は市内にあって、その森林のあり方に責任を負う希少かつ最大の専門技能集団である。制度的には森林組合法に基づく森林所有者の共同組織であり、地域の森林管理の主体として、施業集約化等により森林・林業の再生に積極的役割を果たすことが期待されている。

主な活動内容は、①地域最大の資源でもある森林の「保全整備」と「林産・素材等販売」、②地域の木材の利用が国土資源の保全につながり、流域の人びとの生命にも関わるという事実を踏まえた「木質社会の見える化」という息の長い地域運動である。具体的には、主伐・除間伐・下刈り、枝打ち・作業道作設・集材・造材・搬出・輸送・素材販売・毎木調査・選木・本数調整伐・林地境界（施業界）の画定・団地化説明会・造林事業提案書・・・多岐にわたる。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

提案力、技術力、経営力、安全力をキーワードに組織作りを進めている。

○提案力

団地化、集約化を進め森林経営計画の策定に力を入れており、山主への提案力が求められる。今は600haくらいだが、今後森林経営計画が基本になってくるので数十～数百ha単位で取りまとめていく必要がある。

○技術力

岡崎市の労働人口が16～17万人なのに対して林業事業者は100人もいない。天然記念物のカモンカよりも少ない状況の中で我々が信頼を失うことが無いよう技術を高めて行かなくてはならない。昔から自伐林業をしてきた山主は変な施業をしようものならばすぐに分かってしまう。

○経営力

とにかくコスト感覚を持つと言うことが重要。4年前は赤字だったが、採算が取れていなかった製材加工部門をやめたことで黒字化できた。ただ、本当にやめて良かったのかという思いもある。

○安全力

ヒヤリハットの報告、事故報告を徹底している。毎月1回は安全教育集会を開き、学習会やKY票の提出、ファーストエイドの点検等を行っている。今日も外部企業の講師を招いてコンプライアンスの研修を実施した。安全管理、労務管理、コンプライアンスは厳しくやらなければならない、事務方も重要になる。

今の職員の8割が1ターンの。市外、県外からも思いを持った若いメンバーが外から入ってきてくれることはありがたいが、だからこそ責任も持たなくてはならない。

以前は皆伐・植林もあったが、このごろは植林をしたことがない職員も多い。最近、循環型林業として市有林での皆伐・再造林を始めた。獣害対策としてネットを張るのにコストが大きいのが課題。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

・経営上、材価が安いことは一番の課題。一次産業は一番しわ寄せが来て買い叩かれる。補助金があるから成り立っている。新たな取り組みとしてフォレストストック協会と連携して排出権のクレジット化プロジェクトを始めようとしている。付加価値を高めて行く仕組みとして、森林認証の取得も考えている。

・国の政策がころころ変わるのが困る。現場は長い計画を立てて人や機械の段取りをしているのに。

・現場に入る女性スタッフが増えてほしい。



岡崎森林組合 事務所外観



眞木組合長と森林組合の敷地内に積まれた丸太。
これらの木は市内の公共建築物に使われるとのこと。

その後いかに経過していますか？プロジェクト



おおだの森保護事業者会



対応してくれた人の名前：会長 浅井 董亮
 調査員：唐澤晋平、蜂須賀 功
 レポート作成者：唐澤晋平
 取材日：2016年12月12日(月)
 取材場所：おおだの森 クラブハウス

活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

旧額田町の故郷の森ともいえる「おおだの森」が、燃料革命後の薪炭林の利用低下で手入れが不十分な雑木林に変わってしまった。第二東名高速道路のインターチェンジの設置が決まり、檜山町が玄関口にあたるので、シンボルとしておおだの森の整備が取り上げられ、行政トップの要請で活動が開始された。現在は、有志がサクラとカエデを植栽する活動を月2回の頻度で行うようになっている。その他、イベントとして4月の第2週に花見の会、新年に初日の出を見る会を開いたり、研修会として他事例を見学に行ったりしている。会員数は53人、現地作業は15名から20名程度。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

- ・月2回の定例活動は継続して行っている。植林のほうは一段落して、年に30～50本くらいになってきた。今年も市制100周年記念で桜を植える。維持管理が大変で、桜は陽樹なので支障木や下草刈りに手間がかかる。
- ・活動が継続できていることを誇らしく思う。メンバーは楽しいから参加してくれる。物理的には何も無くても、精神的に満たされるものがある。学校の先生も、おそらくお偉いさんだったと思われる人も、おばちゃんも、みんなでワイワイやるのが面白い。
- ・毎日のように登りに来る常連さんもあるし、週末には親子連れも来る。岡崎市内で整備されていて見晴らしのよい山は少ない。感想ノートを置いているが、良いコメントがどんどん増えて嬉しい。
- ・初日の出イベントの参加者は毎年増えており、今年は400人以上参加した。若い人も結構来てくれる。毎回山頂で豚汁やコーヒー、お汁粉を振舞うが、今年は初めて品切れになってしまった。
- ・今年から岡さんぽ(岡崎商工会議所等が中心となって仕掛けている岡崎の街歩き企画)で山歩きを実施している。初回は急なキャンセルもあり参加者は少なかったが、喜んでもらった。今後も実施して行く予定。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

- ・おおだの森は50haほどあり、70人くらいの山主から借りているが、相続して代替わりしたら桜の木を切って元に戻してほしいという人が出てきた。何とか収まったが、今後そういった意見が出てくるのが心配。活動に理解をいただくためにイベントの案内を山主にもまめに出すようにした。
- ・新しい参加者は時々入ってくる。はじめはメンバーが知り合いの人を連れてきたり、岡崎市の広報だよりを見たりして、その後も継続して来てくれる方がいる。それでもメンバーは60代以上が中心なので、若返りが必要。範囲が広くて手が回りきらない。もう1団体あっても良いくらい。
- ・獣害に困っている。食べられたり枝が折られてしまう。いろいろ試したが、柵で植林した範囲をぐるっと囲ってしまうのが一番効果的。時々シカが中に入ってしまうがそれほど問題でないレベル。ただし柵に引っかかってそのまま死んでいるものもいて、そうなると片づけが大変。ただし、環境学習に来る子どもたちにはサル・シカ・イノシシも自然の一部であって悪者ではないんだと伝えている。
- ・お客さんに対してもっとアカデミックなことを話せるようになっていきたい。自分たちで桜の研究をしてみたい。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

自分も昔恵那に住んでいたのが懐かしく思う。今度むらさきかん(岡崎市東部地域交流センター)で近くの地域で活動している団体の交流会が企画されているが、そういう機会があると他の団体とも交流しやすい。

写真



クラブハウスにて語る浅井会長。前日の活動で使ったチェーンソーのメンテナンス中だった。



登山道沿いに植えたカエデも大きくなり、紅葉が楽しめるようになってきた。



回収された獣害対策用のネット等。

取材者名

浅田益章

井上崇也（岡崎市役所）

江口佳志（BESS北愛知）

沖 章枝（水と緑を守る会・岡崎）

唐澤晋平（NPO法人日本の森バイオマスネットワーク）

近藤 朗（愛知・川の会）

齋藤大祐（岡崎市役所）

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

丹羽健司（地域再生機構）

蜂須賀功（岡崎市役所）

浜口美穂（ライター）

眞木宏哉（岡崎森林組合）

松井賢子

（五十音順）

表紙デザイン・こいけやクリエイト